

アメリカ文学における女性像 : 二つの娼婦物語

著者	辻本 庸子
雑誌名	神戸市外国語大学外国学研究
巻	59
ページ	145-157
発行年	2004-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00000676/

アメリカ文学における女性像－二つの娼婦物語

辻本庸子

セクシャルハラスメントは、権力関係をたてに他者の身体を不法に搾取する行為であり、その権力関係によって相手の自由意思を封じ込めてしまう暴力性を孕んでいる。セクシャルハラスメントが問題視されるようになったのは、ごく近年のことであるが、他者の身体を搾取するという行為そのものは、はるかに古い歴史を持つ。なかでもアメリカで文字どおり身体が搾取され、二十世紀初頭に「白い奴隷」と呼ばれたのが娼婦である。北アメリカ大陸における娼婦の歴史は、植民地の誕生とともに始まるが、その存在が人々の注目を浴びるのは、人口が都市に集中化する十九世紀後半のことである。娼婦を男性の性的欲望の対象となる主体性を抑圧された奴隷とみるか、あるいは一個の独立した職業人とみなすかは意見の別れるところであろう。しかし十九世紀から二十世紀の世紀転換期にアメリカでどのような娼婦像が生み出されていったか、それをみることは、社会学や歴史とは異なった視座から身体の搾取という問題についての考察を可能にするように思われる。

小さな港町として産声をあげたニューヨークは、十九世紀も終わりに近づくとアメリカの発展、進歩のシンボルとして繁栄をほしいままにする。しかしそのような華やかさと隣り合わせに、犯罪の温床である極貧のスラム街も存在し、その窮境を告発する人もあらわれる。ニューヨークで三十年間、刑事として働き、底辺の世界を熟知していたJ. ウォレンもその一人である。彼は『三十年間にわたる犯罪との闘争』（1875）と題する書物を著し、この街が抱える難問、なかでも娼婦に焦点を当てて、その深刻さを指摘した。娼婦を放置することによって、モラルの退廃を招くだけでなく、罪もない家族、子孫にまで性病の影響が広がる危険があるとし、法制度の整備を訴えたのである。¹⁾

社会改革の気運が高まった十九世紀末から二十世紀初頭のアメリカにおいては、ウォレン同様、多くの女性運動家、宗教家、医師、ジャーナリストたちがこの問題を取りあげた。しかしながら娼婦を主人公とした本格的小説となると、その数は少ない。「お上品な伝統」といわれる当時の文化的風潮にあって、正統派の作家が正面から目を向ける主題とはみなされなかったのであろう。そのような中で、娼婦物語の代表といえるのがスティーヴン・クレインの『街の女マギー』(1893)である。ニューヨークのロワー・イーストサイドに育ったマギーが、恋人にも家族にも捨てられ、娼婦になり死に至るこの物語は、この時代の文学界の重鎮、W.D.ハウエルズから「運命の必然性」(quality of fatal necessity)²⁾を描いているとお墨付きをもらう。初版は出版社に断られ自費出版となったが、のちの代表作『赤い武勲章』(1896)の成功にあわせて新たな出版の機会を得ることになる。

日本やフランスとは違い、娼婦物語の系譜が存在しないアメリカであるが、それだけに数少ない娼婦像は逆にアメリカの社会、文化の有り様を知るための興味深い指標になると思われる。スラム訛りを用いて、マギーとその周辺の人々の生活を生々しく描き出したクレインの世界と対比するために、もう一つの娼婦物語を、小説ではなく通俗劇の舞台に求めてみたい。後に映画スターとして一世を風靡するメイ・ウェストが、みずから脚本を書き、主役を演じた「セックス」(1926)である。この芝居は彼女をスターダムにのしあげたが、「品位を乱す、みだらな、不道德な、不潔な」芝居として摘発され、逮捕騒ぎまでひき起こす。もともとこの作品はJ.ブラインの書いた「艦隊を追って」という劇の脚本を元に、ウェストが書き直し「セックス」と改題して上演したものである。一方のクレインも最初は「街の女—ニューヨーク物

1) John H. Warren Jr., *Thirty Years' Battle With Crime, or The Crying Shame of New York, As Been Under the Broad Glare of An Old Detective Lantern* (New York: PoughKeepsie, 1875. rep. Arno Press Inc., 1970) 1870年代のアメリカで一番盛んな論議は娼婦を公的に囲い込む「売春統制」であった。しかしウォレンも推奨するその法制化は、女性社会運動家の強い反発にあい、またヨーロッパでの「売春統制」廃止の流れを受け、実現することはなかった。

2) Stephen Crane, *Maggie: A Gilr of the Streets* (New York: Norton, 1979) p.154. 以後このテキストからの引用は括弧内に“N”とページ数を記す。

語」と題していたが、それを「街の女マギー」と改題して出版した経緯がある。本論においては、クレインとウェストによる二つの娼婦物語の改題の意味を考察し、そこに見られる身体の搾取の有り様を検討してみたい。

クレインのマギー

クレインは一八九三年に私家版の『マギー』を友人に送り、次のように述べている。「環境というのはこの世界において途方もない力を持ち、その中にいる人の人生をお構いなしに作っていく。そのことをこの作品で示そうとしました。もしその説が証明されれば、天国にあらゆる霊が入ることができるようになるでしょう。とりわけ立派な人が、来るはずがないと考えるような、売春をする娘の霊でさえ」³⁾。牧師の父と社会改革を目指した母のもとで育ったクレインは、若い頃から社会の底辺に生きる人々に限りない興味と親近感を抱いていた。ジャーナリストとしてスラムに飛び込み、警察に捕まった娼婦を助けるために、自分の妻だと虚偽の証言までしたこともある。その折「この普通の娼婦が不当に扱われた...たとえ娼婦であっても、女王であっても、その不当さにおいては同じはずである」⁴⁾と主張し、周りのひんしゅくを買う。クレインは娼婦が墮落する素質を生まれ持っているのではなく、むしろ憐れむべき環境の犠牲者だと考えそれをこの作品で証明しようとした。過酷な環境によって娼婦となり破滅する娘が、無垢であればあるほど、その運命が理不尽であればあるほど、環境の無慈悲さが浮き彫りになる仕組みである。

マギーはスラム街の安アパートに住み、酒を飲んで殴り合う両親におびえて幼い日を過ごしたが、やがて「泥土の中に咲いた花」ともいうべき美しい娘へと成長し人目を引くようになる。そんな折、兄の友人、ピートに出会い夢中になる。彼女はピートのパワーボーイ風⁵⁾の洒落たいでたち、そ

3) Stanley Wertheim eds. *The Crane Log: A Documentary Life of Stephen Crane 1871-1900* (New York: H.K. Hall & CO., 1994) p. 89.

4) Norton p.46. クレインはこの事件の顛末を短編“Adventures of a Novelist”に書いている。

の振るまいに心ひかれ、「この人はエレガントで丁重な (gracious) 人に違いない」と信じ込む。その時、ピートがマギーの兄にする話は次のような物である。「このくそったれ! しんそこ、やつらが気に入くわねえぜ! くる日も、くる日も、あの田舎者が店に来やがって、大きな顔をしやがる。そりゃもちろん、すぐにでも通りに放り出してやるさ。何が起こったか、やつらがわかるまえに、俺さまが通りへおっぼり出すってあんばいだ。なあ、わかるか、おまえ」(N.18)。延々と続くこのような会話を聞きながら、マギーは幻滅するのではなく、むしろ「このような貴族的な方」がむさ苦しい自分の家に愛想をつかしはしまいかとハラハラする。これは初めて恋に落ちた娘の高揚した精神状態を示すと共に、一方でマギーの評価とピートが読者に与える印象に微妙なずれを生じさせることになる。それから二人はデートを重ね、マギーはそのような折に見せるピートの丁重で行き届いた (gracious and attentive)、教養ある紳士然とした振るまいに信頼を深めていく。しかしクレインはここでも、マギー以外の方が必ずしもそのようにピートを見ていないことを書き込んでいる。「マギーはうっとり彼をみつめ、彼は偉そうにウェイターに命令をしてふんぞり返っていたが、当のウェイターは知らん顔、つまりは全く耳を貸さなかった」(N.38)。

ふとしたことで母親とマギーの間に諍いが起こり、なりゆきからマギーは家を飛び出して、ピートとともに三週間を過ごすことになる。それまでデートをしてもキス一つ許すことのなかったマギーが、今ではピートに頼り切り、みじめな家と縫製工場から抜け出せたことに満足している。しかし三週間という時間を共に過した後でも彼女は「彼の身なりが示す財力と豊かさ」(N.39)にひかれ、彼の「丁重な (gracious) まなざし」(N.43)を求める娘として描かれている。この執拗な衣服と丁重さへの言及は、マギーが家出という深刻な経験をへても、不自然といえるほど何も変わっていないことを示している。こ

5) 1840年頃からニューヨークのロワー・イーストサイドにあるパワリー通り近辺を根城としていた青年集団の呼び名。夜になるとダンディに着飾って遊びに興じる。乱暴で喧嘩好きだが、外部の者にたいしては結束力を示す。労働者階級の若者文化の走りといえる。

の「変わらないマギー」は、環境や自然の力に翻弄される非力な人間を描くといわれるナチュラリズムの作品ゆえとも考えられるが、それならマギーを取り巻く人物たちはどうかというと、彼らはそれなりの変化を見せているのである。アル中の母親は、マギーの家出を境に「うちの面汚し」とマギーを罵り、母親としての自己を誇示するようになるし、兄は妹の復讐をピートに試みもし、また自分がピートと同じような無責任なことを女にしているのではないかという反省にかられたりもする。ピートは裏切りの張本人だが「俺はそんな悪いやつじゃない」とつぶやきながら酔いつぶれる様には、彼が恋人マギーを捨てたことで内に抱える不安、罪の意識が読み取れるだろう。マギーは、これら母、兄、恋人と比べて、はるかに変わることがない。

ピートに裏切られ、家族からも拒まれ、行くところのないマギーは、ふたたびピートのところを訪れる。恨みや憤りをあらわにしてもよいような場面でありながら、彼女は満足に喋ることもできず、口ごもった後、ただ一言「どこへ行ったらいいの」(N.50)と尋ねる。しかし結局ピートの癩癩に圧倒され、すごすごとその場を立ち去ってしまう。その後は娼婦となって、死を迎えるだけである。「喋らないマギー」は喋らないまま、物語から姿を消していく。抗うでもなく、怒るでもなく、ただ落ちていくのである。

「変わらないマギー」「喋らないマギー」そしてピートのような男に追いつがることしかできないマギーは、実のところ「変われないマギー」「喋れないマギー」であり、無垢とか純粹というより、愚かと呼ぶのが相応しい。マギーの破滅を「運命の必然」とみなす為には、主人公が犠牲になっていることを見落としてはならない。主人公は見事にその存在を矮小化されてしまっているのである。

かつてE.A. ポーが都会の雑踏を歩き回る一人の男の話を「群集の男^{ひと}」という短編で描いた。都会の中の孤独な男の焦燥を、また見るものと見られるものの錯綜を描いた秀作である。『マギー』の第十七章は、マギーが娼婦となって街をさまようこの小説の山場であるが、ポーにならって「群集の女^{ひと}」と題してもよいと思えるほど、見事に娼婦の彷徨を描きだしている。

それは雨の降る夜のこと、劇場がはげ、着飾った人々が道路に溢れ、傘をさして家路に急ぐ。馬車や花売、人々のさんざめき、輝くイルミネーション。光と音と色が交錯するその華やかな賑わいの中を一人の娼婦が歩く。ある時はほほえみ、またある時はつれないそぶりを見せ客を引こうとするが、遊びなれた夜会服の男や急ぎ足のビジネスマンはすれ違うだけ。娼婦は歩き続け、やがて薄暗い通りにさしかかるが、ダービー帽をかぶった青年、労働者、酔っぱらいにも相手にされず、さらにうす暗い通りで、シミだらけの男、目の血走った男にののしられる。最後に川岸の暗闇で出会うのは、「死んだクラゲ」のように体を震わせる化け物のような男で、にやにやしながら娼婦の後を追っていく。そしてどす黒い川の水、黄色い炎を吹き上げる煙突、遠くに聞こえるざわめきの描写でこの章が閉じられる。

前章で恋人ピートにののしられ、最後にマギーはイーストリバーで溺死したというしらせが告げられるのであるから、それらを総合すれば、この章で娼婦として街を歩いているマギーが、この場面の後に何らかの原因で(通説は自殺だが、その証拠もない)死んだとみなすのが妥当であろう。しかしながらこの章の一番の魅力は、この娼婦が一度も「マギー」と呼ばれていないところにある。原文では「娘」「娼婦の娘」「歓楽街の娘」「彼女」などと表わされ、それによってこの娼婦をマギーとも、またほかの女とも読み取ることが可能になる。さらにはこの彷徨を、一人の娼婦の人生そのものと読むこともできるだろう。若くもてはやされた輝かしい時代から、やがてうらぶれて最下層の客を相手にする末期までと。つまり他の章ではリアリズムの手法によって細密描写を行い、特定の時代の特定の場所の様をリアルに浮かび上がらせているが、この章だけは「マギー」という固有名詞ではなく「娘」という普通名詞で呼ぶことによって、時間や空間の枠を超え、読者にその解釈をゆだねる裁量を許しているのである。それによって大都会の何千、何万の娼婦の姿がこの娘に重なりあうことになる。

この普通名詞の効用は、この小説の表題にも通じると思われる。もしこの作品の表題が原題「街の女—ニューヨーク物語」のままであれば、主人公が

何の個性もない愚かな娘であっても、問題がないだろう。なぜなら主人公は第十七章同様、無数の街の女と重なりあう、大勢のうちの一に過ぎないのだから。しかしそれが「街の女マギー」と改題されるとどうだろう。読者の目は必然的にマギーという一人の娘にそそがれ、その人物評価をうながすことになる。その結果、物語の中心に見えてくるのは、無残に人形化されたマギー、顔を持たない空虚な存在のマギーなのである。つねづね娼婦に深い関心を持ち、彼女らを断罪する厳しい世評から救おう、生かしてやろうというヒロイックなクレインの意図は、逆にマギーという人物を事実上の死以前に殺してしまうことによって、成立していることになる。娼婦マギーは物語の中で、作家に人間らしさを奪われるという意味において一度死に、さらに二度目の死をイーストリバーで迎えるのである。マギーへの憐憫の情を明らかにする改題は、皮肉にもクレインがマギーの身体を搾取するその様子を浮き彫りにしてしまう。

ウェストのマーギー

『マギー』を初めとする男性が書いた娼婦物語についての研究書を出したL.ハプケは、二十世紀初頭に娼婦物語を手がけた女性作家が全くいなかったわけではないとしながらも、彼女たちが「十九世紀の先輩同様、娼婦と大差のない姦婦物語『めざめ』を書いたケイト・ショパンのように、作家生命に終止符を打たれることを恐れた」⁶⁾と述べている。性的に奔放な女性を描くことが、女性作家にとって命取りになる時代だったのである。当時の女性作家たちが娼婦物語に取り組む危険を避けたとしたら、だれがそういうタブーに挑戦できるのか。その一番近いところにいたのは、おそらく当時、娼婦とあまり区別されることのなかった舞台女優ではないだろうか。世紀転換期は、ヴォードビル、ミュージカル、バーレスクなどの大衆芸能が人気を呼んだ時代である。各種の芸人の技を集めたヴォードビルは、家庭向けの健康な

6) Laura Hapke, *Girls Who Went Wrong: Prostitutes in American Fiction 1885-1917* (Bowling Green, Ohio: Bowling Green State U Popular P, 1989) p.2.

娯楽として人気を呼んだが、その一方で男性客相手にセックスアピールを売り物とする女優も登場した。その中でもメイ・ウェストは、脚本を書いて自らの世界を創造し演出する、当時としても稀な女優であった。

ウェストは幼い頃からヴォードビルの舞台にたった根っからの舞台人であるが、次第に書くことに興味を覚え、自分の歌や台詞、スキットなども書くようになる。ミュージカルや芝居で端役を長年演じていたウェストが本当の意味で女優としてのキャリアを始めるのが娼婦を主人公にした芝居「セックス」である。続いて「ドラッグ」「道楽男」という同性愛を扱った脚本を書き大いに物議をかもすが、人気を呼んだ「ダイヤモンド・リル」が映画化され、ウェストは四十歳にして映画のドル箱スターとなる。

「セックス」は三幕物の芝居で、第一幕はモンリオールの歓楽街にある娼婦マーギーの部屋で始まる。客引きのロッキーはマーギーと口論をした後、めかしこんで出かけていくが、マーギーがなじみの客であるグレッグ大尉と外出すると、一人の婦人をつれて帰ってくる。そしてその女に甘い言葉をかけて薬を飲ませ、女が倒れると宝石を奪って去っていく。帰ってきたマーギーらは、女に気づいて急いで介抱するが、やってきた警官に女は、マーギーにだまされたと虚言をはき帰っていく。第二幕ではマーギーがモンリオールを去り、グレッグがすすめる艦隊つきの娼婦の一团に入って、トリニダッドへやってくる。ちょうど商用で来ていた資産家の息子ジミーは、マーギーに恋をし求婚をする。初めは聞き流していたマーギーも、素性を隠したまま新しい人生を始めることができるのではと結婚を受け入れる。第三幕ではジミーのコネチカットの邸宅に許嫁としてマーギーがやってくる。会った途端にマーギーは、ジミーの母クララがモンリオールで介抱した女であることが分かる。クララはジミーのことを諦めてくれと懇願するがマーギーは受け入れない。そこへ突然、ロッキーがクララから金をゆすろうとやってくる。マーギーはクララにかわって首尾よくロッキーを追い払うが、その時やってきた警官がかつての客だったことが分かったと、即座にジミーとの結婚を諦め、別の新天地へ旅立っていく。

クレインのマーギーが顔のない、アマチュアの娼婦だとすれば、ウェストのマーギーは自信に溢れたベテランの娼婦である。そして彼女の特徴はその人間的魅力にある。娼婦も立派な職業であり、「どんな職業でもトップになるチャンスはあるものよ」⁷⁾と豪語する勇気と野心。肉体的魅力で男を引き付けることなどあきあきし、「それを超えた愛を持つ人と一緒になりたい」(W.75)と夢見る純な心根。拳銃をロッキーに向けながら、警察に通報する時「あんたのために予約をするのよ。あたいのいい人はこれから二、三十年分のお宿にどこがお好みかしら」(W.88)というウィット。ジミーとの結婚にかけると言いながら旗色が悪いと即座に計画を変更する機転、そしてどんな時も自分の意志で選び、実行し、適格な判断を下す才覚。最後にジミーに別れを告げる時、自分の素性を明らかにして去っていく正直さ。このように都会の頹廢のシンボルのようにみなされる娼婦が、豊かな人間性を持つ存在として描かれているのである。

さらにマーギーとクララの対決は、単にドタバタ喜劇的な要素を生み出すだけでなく、この娼婦物語の秘める転覆力を明らかにする。モンリオールでクララが裏切った時、マーギーは「このことは一生忘れない。もしチャンスがあれば、仕返しをするわ、インチキ女め、仕返しをね(get even)」(W.56)とクララに言う。これは単に裏切られた借りをかえすというだけでなく、金も名誉もある富裕階級の夫人と対等(even)になってみせるというマーギーの決意でもあるだろう。その予言が成就したかのように、息子の許嫁として現れたマーギーはクララに「私より一段高いところに立っているつもりね。私のしてきたことは、生きるためにしなければならなかった。悪いことだと分かっているわ。弁解するつもりはない。でもあなたは同じことを他の理由でやったのよ」(W.74)と言い、気紛れな隠れ娼婦とプロの娼婦の優劣を問う。そしてその答えを示すかのようにマーギーは、ロッキーを殺そうとしたクララの手から拳銃をとり、すべてをうまく処理してみせる。富裕階級の

7) Mae West, *Three Plays by Mae West* (London: Nick Hern Books, 1997)p.40.

以後このテキストからの引用は括弧内に"W"とページ数を記す。

夫人にはないマーギーの経験と度量が示され、社会的な常識による二人の序列が見事に覆されてしまう。

先にこの話はJ.ブラインの原本にウェストが手を加えたと述べたが、その一番大きな変更が結末部である。原作では、マーギーはジミーに捨てられ、娼婦に逆戻りするが、それをウェストは、グレッグとオーストラリアに行つて結婚するという筋書に変える。『街の女マギー』の出版の際にクレインの友人の一人は、娼婦を肯定するような作品は出版してもらえないとクレインに忠告したと言うが⁸⁾娼婦小説においても、ブロードウェイの芝居においても、娼婦は死や病気といった破滅を迎えるのが通例であった。しかしウェストは過去にとらわれず、未来に向かって進んでいくという例外的な大団円をマーギーに用意する。「セックス」は一九二六年四月に幕を開けたが、ジャズバンドの演奏やウェストの歌と踊りが組み込まれた芝居は、批評家の酷評にもかかわらず、三八五回のロングランとなった。しかし一九二七年二月に摘発を受け、ウェストは逮捕され、有罪となって罰金と十日間の拘留処分となる。

アメリカでは一八七十年頃から、良俗を守るための検閲が行われるようになり、次第にその厳しさは増していった。文学においてもモラルが強く求められ、内外の多くの名作が問題視されて発禁処分となる。舞台においても同様の検閲が行われたが、ウェストの場合は「セックス」よりも次の「ドラッグ」が問題視され、それに関する当局の勧告に従わなかったウェストへの処罰として「セックス」が摘発されたという。それにしても若者のモラルに悪影響を与えると告発するのであれば、「セックス」という題名ほど好都合なものはない。ではウェストはそのような状況下にあることがわかっていて、なぜ改題をしたのだろうか。

ウェストのしぐさ、声、目線などをじかに目にしない限り、この芝居の本領はわからないのかも知れない。しかし脚本から判断する限り「セックス」という表題は不釣り合いに思える。確かに娼婦が主人公ではあるが、性的な

8) Hapke, p.48.

きわどい場面があるわけではなく、むしろ周りを超越したようなマーギーのくりだす台詞のおかしさが妙味となっている。それではそれをわざわざ「セックス」と改題するウエストの意図はどこにあるのだろうか。一つには、人々をアッと言わせるような過激な題をつけて集客をねらう興行上の作戦といえるだろう。この芝居には海兵隊員が殺到したと言われているが、若い観客ならこの題だけでも引きつけられるかもしれない。第二にこれをウエストの娼婦宣言ととることはできないか。娼婦は自分のセックスを商品化し、客にそれを売る。ウエストは自分の「セックス」を商品化して、観客にそれを売り込む。そのために女優として観客に大っぴらに媚びを売り、しなを作り、笑わせる。それが強烈な印象を与えることになり、それによって本来ならもっと目につくはずの、マーギーがクララを圧倒する転覆性、娼婦にハッピーエンドを与えるという例外性のインパクトが弱められることになる。そして他に例を見ないほど強くて賢い娼婦像をつくりだすことに成功するのである。通俗劇の女優の多くは、舞台の上で男の視覚的欲望に供することが務めであった。その意味では娼婦との共通点があると言えよう。ウエストはそれを逆手にとって、男たちの欲望へのサービスを大仰に行い、その影で自らの身体を取り戻す女の物語を演じた。改題によって生じる中身とタイトルのずれは、あくまでウエストの戦術であり、それによって他者に支配される女の身体から、自ら支配する女の身体を取り戻すことになるのである。

ウエストと検閲との戦いはその後も、舞台で、映画で、延々と続く。しかし逮捕も摘発もウエストにとっては格好の宣伝となるにすぎず(あるいは少なくともそのようにみせる)、権力に屈することなく戦う闇の世界の女王像を強く印象づけた。それでも検閲によって彼女の信条とする短く洒落た台詞の鋭さがそがれていくことは避けられず、やがて一線を去っていくことになる。しかし彼女はそれから折に触れて舞台や映画に戻り、自分で築き上げたメイ・ウエスト像の健在さを執拗なまでにアピールし続けていく。常に自分の有り様を自分で演出する自立性を保ち続けたという意味でも、ウエストは自らの身体を取り戻した「セックス」のマーギーを地で生きたと言えるだろう。

まとめ

クレインはスラムの娼婦を主人公とする物語を、これまで誰も書いたことがないようなリアルなタッチで書きしるした。それは主題においても、また手法においても、それまでの枠をこえる作品であった。しかしながら主人公のマギーに関する限り、その人物像は平板で魅力に乏しい。純粹で、疑うことを知らず、怒りや憎しみを感じることもない、まして官能性とも無縁なマギーは天使のようで、十九世紀アメリカに流布したヴィクトリア朝的「真の女らしさ」のカテゴリーとも合致する。判断力、決断力、自立心などはもちろん必要とせず、その天使像にとどまる限りにおいて、マギーは天国へ入ることを許される。

しかしながら十九世紀のアメリカにおける娼婦が現実にはもっと複雑な顔を持っていたことをC. スタンセルは『女の街』(1987)において述べている。⁹⁾それによると十九世紀半ば頃までの娼婦のカテゴリーには二種類あり、一つは悪者の餌食となって身を落とす無垢でうぶな女性、もう一つがセックスや酒に溺れる救いようのない悪徳の女性だとする。しかしスタンセルがさらに紹介するのは、第三の型とも呼ぶべき新しい娼婦である。厳しい親の束縛から自由になりたい、もっと派手で豊かな生活がしたい、苛酷な工場労働や家事から自由になりたいと理由は様々だが、自分の自由意志で気ままに売春を選択する娘たちである。それは彼女たちなりに状況を判断して選んだ「抜け目のない行為」(189)であり、自分の部屋などという貧しい娘には手の届かない物を可能にしてくれる「ある種の自主性を手にするチャンス」(190)をも意味した。

クレインはスラムを愛し、娼婦を愛した作家であった。それゆえに娼婦を主人公にし、娼婦のエレジーともいえる『マギー』第十七章のような美しい文章を残した。しかし先の分類でいえば典型的な第一のカテゴリーに属するマギーは、これまでみてきたように作家の鋳型にはめれた顔のない人物にし

9) Christine Stansell, *City of Women: Sex and Class in New York 1789-1860* (Urbana and Chicago: U of Illinois P, 1987) pp.171-192.

か過ぎない。それが運命の苛酷さを描こうという作家の意図が優先した結果であるとすれば、男が欲望に憑かれて娼婦の体を餌食にしたように、クレインもまた自分の欲望に従い、女の身体をうばいといったと言えるだろう。そして自立心を持ち、自分の道を選択する才覚をもった第三の型に類する娼婦が登場するのは、非難され、蔑まれた二十世紀の通俗劇の中であった。これら二作品は共に原題のほうがより物語の内容に忠実だといえるが、改題によってより明確に作家の意図や本質が見えてくるように思う。クレインの場合は彼のヒロイックな行動の裏にある矛盾が、ウェストの場合は作家、演者として女の身体を奪いかえす作戦が。ただしこのウェストによる娼婦像は自分の身体を取り戻すために、自分の身体を売り物にするという逆説を孕んでいることも事実である。娼婦は単なる犠牲者から、犠牲者であり仕掛人であるという、より複雑な存在へと変貌していく。そしてこのような身体をめぐる搾取の問題の錯綜性を身を持って表現する女性があらわれたのが、一九二十年年代のアメリカであった。

娼婦の歴史は長い。娼婦は単に売春を行う者というだけでなく、「神殿の聖娼」「色恋の女神」「漂泊の聖者」など国により文化によって異なる多彩な役割をになってきた。¹⁰⁾ しかしながら歴史が浅く、しかもキリスト教倫理が浸透したアメリカにおいては、娼婦は想像力の対象となるよりも、法的規制の対象となることの方が多かった。したがってクレインやウェストが娼婦物語を書くこと自体、非常なリスクを背負った行為であったことは言うまでもない。しかしながら抑圧されているがゆえにこれらの娼婦物語は、単に身体の問題だけではなく、アメリカ文化における性、ジェンダー、モラルなどさまざまなテーマの交錯するトposとして、更なる研究の欲望対象となりうるのである。

10) 娼婦の歴史的変遷については、佐伯順子『遊女の文化史—ハレの女たち』中公新書 1987。J.G.マンシニ『売春の社会学』寿理茂訳 白水社 1964。バーン&ボニー・ブロー『売春の社会史—古代オリエントから現代まで』筑摩書房 1991。などに詳しい。